

課題探究学習による主体性の育成

井寺 美穂

目次

- I はじめに一問題意識―
- II 課題探究学習とは何か
- III 実践事例
- IV 結論―課題探究学習と主体性との関係性―

I はじめに一問題意識―

少子高齢化による人口減少やグローバル化の進行、ICT を用いた社会経済環境の変革など目まぐるしく地域の状況が移り変わるなかで、私たちひとりひとりが持続可能な社会の担い手として、それらの社会の変容に対応する役割が求められている。このような VUCA（ブーカ）時代¹において、地域の将来を担う若者に期待される役割は大きい。情報過多を乗り越えながら必要な情報を見極め、現状を客観的に理解し、他者と協働して地域課題を解決することが期待されている。平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申では、「予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要であること、こうした力は全く新しい力ということではなく学校教育が長年その育成を目指してきた『生きる力』であることを改めて捉え直し、学校教育がしっかりとその強みを発揮できるようにしていくこと」が重要であると示されている²。

このような動きは、学校教育の現場だけではなく、政治行政や地域づくりの現場においても顕著である。事実、近年における若者参画政策に関する関心は高い³。人口減少社会のなか

¹ 社会のなかで環境が目まぐるしく変化し、将来の予測が難しい状態であることを示す用語であり、Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）という 4 つの単語の頭文字をとったものである。

² 文部科学省（令和 5 年/第 2 版）『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説総合的な探究の時間編』、学校図書株式会社、3 頁。

³ 若者参画政策とは、若者の社会的自立に着目して、すべての若者が、自治体の政策形成及び地域づ

で、持続可能な地域づくりを行っていくためには、その支え手である若者を公共の担い手として適正に評価し、彼らの前例や慣習に捉われない独創的な発想や行動力に大きな期待が寄せられている⁴。但し、若者自らが、自然に地域課題に関心を寄せ、それらの政策形成を行う力を身に着けるわけではない。そのような知識や経験に触れる学びの場を提供することにより、主体的な思考や行動が醸成される。

そこで本研究では、課題探究に係る学びによって、若者の主体性がどのように育成されるのかについて、帰納的アプローチによりその仮説を考察する。まずは課題探究に係る学びとは何かについて整理したのち（Ⅱ）、その実践事例を論述する（Ⅲ）。最後に、それらの観察結果から主体性を育成する仮説について検討する（Ⅳ）。

Ⅱ 課題探究学習とは何か

課題探究学習とは、学習者が社会で生じている問題について、主体的にそして協働的にその本質を見極めた上で、課題を設定し、その問題解決のために情報収集やその分析を行いながら学びを深める学習スタイルのことである⁵。一般に、問題とは、社会のなかで「何かおかしい」と感じたり、考えられる場合に用いられる概念であり、理想と現実ギャップのことである⁶。

また、一般に学びや学習とは、学習者が家庭や学校、その他の活動領域において、知識やスキルを獲得したり、経験を通して自己の意思や行動の選択の幅を拡げることができる活動のことである。つまり、課題探究学習とは、学習者が地域社会の問題について、その本質を見極めた上で、その問題解決のための主体的・協働的活動を通して知識やスキルを習得し、また経験を通して自己の意思や行動を変容させる活動である。

学校教育の現場では、「①課題の設定（問題の本質を見極め、問題解決の方向性を設定する）」→「②情報の収集（必要な情報を収集する）」→「③整理・分析（収集した情報を、整理したり分析したりして思考する）」→「④まとめ・表現（気づきや自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する）」という課題探究のプロセスを意識した学習活動が実施されている。また、この活動を発展的に繰り返しながら、学びを深めていく。

若者は学校などの学びの場において、多くの知識や概念を学習するが、その多くは先人た

くり・まちづくりに積極的に参画し、闊達に意見を述べ、活き活きと活動することを後押しする政策のことである。これについては、松下啓一（2022）『若者をまちづくりに巻き込むための政策立案ハンドブック—多様な成功事例からよくわかる進め方のポイント—』、第一法規株式会社、2頁を参照した。

⁴ 同上（松下）8-9頁にも同様の指摘がなされている。

⁵ 学校教育の場においても、「総合的な学習の時間」「総合的な探究の時間」等として導入されている。

⁶ 問題と課題は区別され、問題が「理想と現状のギャップ」であるのに対して、課題は「問題解決のために、誰（何）を、どのように変化させるのか」、その問題解決の方向性を意味する。但し、公的な介入が必要な問題を課題ということもある。現代の問題は複雑化し、公共の担い手のひとつである行政単独で解決できるものは少なく、民間や市民の協力や理解が不可欠であるといわれる。また、問題の性質は多様で、且つそれぞれの問題間は複雑に結びついている。更には、動的で、取り組んでいるうちにその内容は変化する。そのため、関係者にそれぞれのやり方で問題に関わってもらわない限り、真の解決は望めないともいわれる。

ちの探究活動によって作り出されてきた既に出来上がった安定的なものである⁷。通常、学びの場ではこのような知識や概念を学習するが、課題探究学習では出来上がった知識を学習するのではなく、知識が生成されるプロセスを自ら辿ることによって学習を進めることに特徴がある。更には、それらの学習を他者との交流活動を通して実施し、自身の考えを深めながら問題解決のための究明活動を行うことで、学習者の思考力や判断力、表現力の育成を目指す。

III 実践事例

1. 取組概要

先述の課題探究活動のプロセスを取り入れた「地域課題解決のための学びのプログラム」を2022年度から2024年度にかけて3ヵ年実施した。本取組は、若者の主体性の育成を目的とし、若者が地域課題をテーマに、グループ活動を通して、政策形成に取り組むという内容のものである。地域の未来を担う若者を対象に、「地域課題解決のための学びのプログラム」と題して、課題探究に係る「学びの場」を提供し、約半年間の中長期且つ連続・発展性のあるプログラムを展開し、地域課題を解決するための政策づくりの手法を指導した。

2. 対象者および活動場所

令和2年7月豪雨によって被災した球磨川流域市町村に居住する中高生および大学生⁸を対象に、参加者募集のチラシを制作し、各市町村の教育委員会およびその地域に所在する高等学校に案内した。

また、教育プログラムを実施する活動拠点として、熊本県球磨村に所在する「田舎の体験交流館さんがうら」を利用した。本施設は、球磨川やその支流である鵜川、那良川に囲まれた自然豊かな地域に位置し、一勝地第二小学校の閉校を機に、平成23年4月に学校跡地を活用して開設された宿泊可能な施設である。

3. 実践内容

(1)2022年度の取組み

先述のとおり、約半年間の中長期且つ連続・発展性のある教育プログラムを実施し、地域課題の発見やその解決手法を考察するための政策形成の手法を指導した。プログラム全体を通して、16名の若者が参加したため⁹、3グループを編成し、課題探究学習に取り組んだ。

2022年度は「持続可能な地域づくり」をテーマに、参加者たちに調査地域を選択してもら

⁷ 田中耕治（2015/初版第10刷）『やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ よくわかる授業論』、株式会社ミネルヴァ書房、84-85頁を参照した。

⁸ 大学生については、熊本県立大学行政学研究室の学生が参加した。

⁹ 全プログラムに何らかの形で参加した若者は計16名であった。その内訳は、中学生2名、高校生5名、大学生9名であり、そのうち15名（中学生2名、高校生5名、大学生8名）に修了証を授与した。

い¹⁰、グループ毎に問題の発見及び課題の設定、政策の立案等の作業を実施した。以下の図表1は、2022年度のカリキュラム表である。以下の図表のとおり、全3回のプログラムを実施し、第1回は8月にチームビルディングの実践や政策形成の初期段階で必要となる知識の提供、政策形成のプロセスに係る説明を行った。また、第1回から第2回のプログラムまでの期間中に、月1回の頻度でグループ毎の定期指導を実施した。その際、グループ毎に調査地域の選択や問題発見、課題設定等の作業を行ってもらった。また、第2回プログラムでは、政策立案を行う際に必要となる知識や技術に関する授業を行った。また、この回は1泊2日の宿泊研修として実施し、2日目は現地調査やその振り返りを中心に授業を展開した。そして、最後の第3回プログラムでは、政策をブラッシュアップする視点や方法に関する授業を行い、その知識を生かして、グループ毎に学びを深めるための活動を実施した。そして、最終日である第3回プログラムの2日目の午後に成果発表会という形で、保護者やマスコミ関係者を招いて取組成果の発表会を開催し、最後に修了式を実施した。図表2は、授業風景やグループ活動の様子、修了式後の全体写真を撮影したものである。写真の様子のとおり、積極的にグループ内での意見交換を行い、協働的なグループワークの様子が見られた。

図表1 2022年度のカリキュラム表

(時間)	10	12	14	16
第1回(8月)	オリエンテーション	チームビルディングの実践	休憩	人吉球磨地域の現状 問題とは何か 問題発見の方法 政策とは何か 課題設定の方法
第2回(11月)	前回の振り返り	政策立案とは何か	休憩	地方創生を支える仕組み インタビュー調査の方法
	現地調査(フィールドワーク)		休憩	SDGsをヒントに地域課題を解決しよう！ アイデアを広げてつなげるワークショップ
第3回(2月)	前回の振り返り	政策の実現性を高める手法	休憩	政策をブラッシュアップする方法 グループワーク
	グループワーク		休憩	練習会 成果発表会

(出典) 筆者作成

成果発表会の席では、それぞれのグループから「若者の集うまち-魅力的な図書館づくり-」「インターナショナルホーム-多文化共生による持続可能な地域づくり-」「地元企業の認知拡大」の題名のもと、持続可能な地域づくりのための政策提案が行われた。

¹⁰ 球磨川流域市町村のなかから、自由に選択してもらった。

図表 2 2022 年度プログラムの様子



(出典) 筆者撮影

(2)2023 年度の取組み

前年度と同様に、若者の自主性を高めるために、球磨川流域の市町村に居住する若者を対象に、課題探究学習のための「学びの場」を提供した。この年は、プログラム全体を通して、15名の若者が参加した¹¹。

2023年度は、テーマを「災害に強いまちづくり」と設定し、調査対象地域を教育拠点の位置する球磨村に限定した。その上で、成果発表会に自治体関係者を招待し、球磨村役場（村長）に政策提案をすることを目標に課題探究活動を展開した¹²。

この年のカリキュラム表が図表3のとおりである。「チームビルディング」→「問題発見」→「課題の設定」→「政策立案」→「政策のブラッシュアップ」→「成果発表」という基本の枠組みは前年度と同様であるが、本年度のテーマ「災害に強いまちづくり」に合わせて、考察を深めたり、気づきにつながるように「危機管理」や「防災」に関する話題や情報提供

¹¹ 全プログラムに何らかの形で参加した若者は計15名であった。その内訳は、中学生1名、高校生7名、大学生7名であり、そのうち9名（中学生1名、高校生3名、大学生5名）に修了証を授与した。

¹² 成果発表会当日は、副村長（村長の代理出席）に対して政策提案を行った。

を行った。また、球磨村の被災地域や復興状況を確認するためのフィールドワークを実施した。図表4は、授業や修了式後の全体の様子を写真撮影したものである。

図表3 2023年度のカリキュラム表

(時間)	10	12	14	16
第1回(8月)	オリエンテーション	チームビルディングの実践	休憩	問題とは何か 問題発見の方法 政策とは何か 課題設定の方法 事例紹介
第2回(9月)	前回の振り返り	危機管理とは何か	休憩	緑の流域治水の取組み 政策立案の手法 インタビュー調査の方法
第3回(10月)	前回の振り返り	球磨村における防災の取組み	休憩	暮らしの安全と安心を支える「地域のつながり」
	現地調査(フィールドワーク)		休憩	アイデアをつなげてひろげるワークショップ
第4回(1月)	政策の実現性を高める手法	政策をブラッシュアップする手法	休憩	ソーシャルキャピタル理論の新展開: ネットとリアルの融合による新たな地域のつながり グループワーク
	グループワーク		休憩	練習会 成果発表会

(出典) 筆者作成

図表4 2023年度プログラムの様子



(出典) 筆者撮影

成果発表会では、2グループが「防災知識を身に着け、地域の絆を深める“防災運動会”」「現代の技術を生かした災害対策」防災DX“”という題名のもと、災害に強いまちづくりの

ための政策提案を行った¹³。前者のグループは、避難における「逃げ遅れ」が生じる要因について調査した上で、公助の限界を指摘し、「災害は必ず起きる」という考えを前提に、防災の取組みを住民レベルで防災文化として定着させていくための提案として、防災運動会の開催を提言した。また、後者のグループは、高齢者を早期避難へと導く「避難インフルエンサー」¹⁴となる若者の育成や VR を活用した防災啓発の必要性について提案した。

(3)2024 年度の取組み

過去 2 年と同様に、若者の自主性を高めるために、球磨川流域の市町村に居住する若者を対象に、約半年間にわたる中長期型のプログラムを開催した。2024 年度は、プログラム全体を通して、17 名の若者が参加した¹⁵。

また、テーマを「防災文化を育むまちづくり」と設定し、政策立案だけではなく、その実践力を育成することを意図して、前年度の成果発表会にて提案がなされた「防災運動会」の取組みを事例に、企画案の検討およびその実践を試みた¹⁶。プログラムの前半は座学を、後半は実践のためのグループワークの時間を中心にカリキュラム編成を行った。運動会開催の実施にあたっては、運動会に係る企画書の作成や、地域の関係機関に対する事前協力依頼や説明、運動会のプログラム内容の検討、競技内容の検討、当日の進行シナリオの作成、参加者募集を呼びかけるポスター（チラシ）の作成など、実施段階で求められる具体的な準備作業の必要性への認識、気づきにつながる活動となった。

以下の図表 5 は、2024 年度のカリキュラム表を示したものであるが、本図表のとおり、第 1 回および第 2 回プログラムは、前年度と同様に「チームビルディング」→「問題発見」→「課題の設定」→「政策立案」という政策形成の初期段階で求められる知識や技術を身に着けることができるような授業内容とした。また第 3 回および第 4 回プログラムは、防災文化の醸成のための具体的な取組みとして、防災運動会の企画を行うための作業時間を多く取り入れた。特に、第 3 回目に実施したフィールドワークでは、同日に開催された球磨村復興祭の参加者へのヒアリング調査を実施し、村民の防災意識の現状や防災文化を醸成する意義を見出す活動となった。

また、昨年度までは最終回に外部関係者を招いて発表会を開催したが、2024 年度は同様の形式ではなく、政策実践型の成果発表会を開催する＝防災運動会を試行することで、そのイベント実施を成果発表会に代えた。但し、全体の振り返りの場として、最終日の午後に内部での成果発表会を開催し、それぞれのグループから学びの成果や反省点などの報告が行われた。図表 6 は、プログラム参加者が防災運動会の参加者募集を行うために制作したチラシ（A4 サイズ、表・裏面）

¹³ 防災運動会とは、地域のイベントに防災の要素を取り入れた競技を加えて、多様な世代が楽しみながら防災の知識や技術を学ぶ取組みのことである。近年、高知市や一宮市、松阪市、東京都大田区や北区など、多様な地域で防災運動会の取組みが実施されている。

¹⁴ 災害情報を正しく理解し、発信できる人（信頼される人）であり、災害時にはリーダーとなって周囲の人たちに情報を拡散させ、避難に対して大きな影響を与える人のことをいう。

¹⁵ 全プログラムに何らかの形で参加した若者は計 17 名であった。その内訳は、高校生 7 名、大学生 10 名であり、そのうち 10 名（高校生 5 名、大学生 5 名）に修了証を授与した。

¹⁶ 運動会の開催にあたっては、球磨村公民館五分館や田舎の体験交流館さんがうら運営委員会等の多くの関係機関の協力を得た。

であり、図表 7 は競技の企画書の一例、そして図表 8 は、防災運動会当日やフィールドワーク、修了式後の全体集合の様子を撮影した写真である。

図表 5 2024 年度のカリキュラム表

(時間)	10	12	14	16
第1回(8月)	オリエンテーション	チームビルディングの実践	休憩	問題とは何か 問題発見の方法 政策とは何か 課題設定の方法 インタビュー調査の方法
第2回(9月)	前回の振り返り	防災文化とは何か	休憩	緑の流域治水の取り組み 政策立案の手法 政策づくりの実践
第3回(10月)	防災運動会とは何か	球磨村における防災の取り組み	休憩	地域のつながりと防災文化
	現地調査(フィールドワーク)		休憩	アイデアでひろげるワークショップ
第4回(12月)		防災運動会の準備	休憩	防災運動会の開催
	グループワーク		休憩	練習会 成果発表会

(出典) 筆者作成

図表 6 防災運動会の参加者募集を行うために制作したチラシ

運動を通して楽しく防災について学ぼう!!

防災運動会

日時 令和6年12月21日(土)
13:30~16:30

場所 田舎の体験交流館さんがうら
体育館

持参物: 体育館シューズ(外履きでも構いません)
飲み物・タオル

参加ご希望の方はこちらのQRコードを
読み取り、回答をお願いします!
期限: 令和6年12月19日(木)



共催 球磨村 公民館第五分館
熊本県立大学 総合管理学部 公共・福祉部門 行政学研究室

本取組は、熊本県立大学が実施する「中学生を対象にした地域課題解決のための学びのプログラム」の授業として実施するもので、中高生たちが大学生と一緒にチームで課題探求や解決のための企画から実施までを行っています。
※本プログラムは、熊本県立大学が「流域治水を核とした復興を起点とする持続社会」を形成するための研究活動の取組みの一環として実施するものです。

表面

プログラム

1	13:30-13:50	開会式	1. 開会宣言 4. 記念撮影 2. 開会挨拶 5. 準備運動 3. 参加者紹介
2	13:50-14:25	競技①	防災知識check!!
3	14:35-15:10	競技②	防災スピード選手権
4	15:20-15:55	競技③	災害からの危機脱出レース
5	15:55-16:10	閉会式	1. 結果発表 2. 講評 3. 閉会宣言

競技内容

競技①: 防災知識check!!
3択クイズとジェスチャーゲーム! 災害時の備えや対策について知識を深めるための問題に挑戦! 緊急時の行動についての理解を深め、あなた自身や大切な人を守るようになろう。3択クイズではチームの仲を深めながら、年齢や性別が違っても防災に関する意見を深めるよ。ジェスチャーゲームでは、誰かにいる人が何を言っているかを当て、災害時とちの立場に立って思い通りに実際に体験してみよう!

競技②: 防災スピード選手権
災害時に必要な物を運ぶ技術や協力の重要性を学ぼう! 避難所での物の管理を想定し、チームで準備してある水、大きな箱、ポリタンク、ブルーシート、毛布等をコンテナに詰め、道具を用いて、別の場所へ移動させるというタイムアタック形式で競争! 最も早く資材を運べたチームが勝利! チームが連携して行動することで、円滑な避難所運営のシミュレーション訓練となるよ。災害時に身近な道具を活用するスキルと、迅速な対応能力を養うことに期待大!

競技③: 災害からの危機脱出レース
災害が起きた際の行動を想定し、身の安全を確保するためにさまざまな安全防具を装着してスタート! 狭い場所をくぐったり、高い壁を乗り越えたりして避難所の設置移動の訓練をするよ。また、身近にあるものを担架を作成し、人を想定した重たいものを担架で運んで、最後にお題に書いてある災害時に使う道具の借り物競走をしてゴール! 身近にあるものが、災害時に利用できることを学びながらレースしてみよう!

裏面

(出典) プログラム参加者作成

図表 7 防災運動会の競技方法を周知するための文書

災害からの危機脱出レース

災害時に安全・迅速に避難し、発災時に役立つ
身近な道具について学びます。

競技方法の説明

≪ 競技の概要 ≫

2 人×3 チームで行い、他チームと競争します。

【障害物競走】

- ・災害が発生した後の行動を催しており、障害物の回避行動を行います。

【担架づくり】

- ・けがが発生したときに担架を身近な道具で作ります。

【借り物競争】

- ・お題に書かれた道具を借りてゴールを目指します。

【障害物競走】

- ① ヘルメットや軍手、防災バッグなどを装着します。
- ② 長机(ブルーシート)をくぐったり、平均台を渡るなどの障害物の回避訓練を行います。

【担架づくり】

- ① 待機していた二人目の参加者と合流します。
- ② 毛布の両端をしっかりと内側に巻いて担架を作ります。
- ③ 運ぶ際に、こちらで用意した重いものを二人でお題のある場所まで運んでもらいます。

【借り物競争】

- ① お題ゾーンにあるお題(紙)を取ります。
- ② お題に書いてあるものを借り物ゾーンから選び、コーンまで戻ります。
- ③ コーンの外側を通り、お題と借り物が合っていればゴールです。
- ④ 合っていない場合は、ゴール地点から借り物ゾーンまで戻り、再び借り物を選び、コーンの外側を通ってゴールを目指してください。

以上を行い、早くゴールできたチームの勝利です。

●人員 一組:二人

●資材 バッグ、2Lの水、ヘルメット、軍手、長机(ブルーシート)、平均台、毛布、マット
借り物(懐中電灯、タオル、ホイッスル、医療バッグ、防寒具、衛生用品、電話機、非常食、ブルーシート、バケツなど)

点数

1位 10点

2位 8点

3位 5点

(出典) プログラム参加者作成

183

図表 8 2024 年度プログラムの様子



(出典) 筆者撮影

IV 結論－課題探究学習と主体性との関係性－

以上のとおり、3 ヶ年に渡る課題探究学習に係る研究活動を通して、参加者の主体性を育む活動を実践した。活動観察による情報収集および参加者に対するアンケート調査（自由記述式）から¹⁷、以下の仮説を見出すことができた。

学習者のグループワークにおける態度や行動からは、[他者との交流のなかで、個々の違いを認識し、その認識が彼らの行動に影響を与える]こと、そして[同学生・世代同士のグループ活動（高校生同士、大学生同士など）では均衡な役割分担が見られる]のに対して、[学年・世代が異なる者同士（中学生と高校生、高校生と大学生などの組み合わせ）のグループ活動では、高学年の世代への依存傾向が見られる]こと、他方で[高学年の世代の知識や態度、行動力に影響を受け（彼らをロールモデル化し）、学習に対するモチベーションが高まったこと]を確認することができた。

¹⁷ 観察期間は、プログラム実施期間であり、観察対象者はプログラム参加者である。

更には、実践的活動（防災運動会）の場面では、[当初は活動のひとつひとつを高学年の世代に相談して行動をしていた低学年の学習者において、時間の経過とともに、積極的・自主的な態度が見られた]こと、[成功体験が自己の判断や行動に対する自信へとつながり、自主性を向上させた]ことを確認した。また、課題探究学習のプロセスにそって、探究学習を進めることにより、[計画性や今後を見通した対処—想定力—の向上]が見られる学習者もいた。

そもそも主体性とは、当事者が自己の立場において強い意志や方向性を保持し、それを根拠に選択したり、考えたりすることをいう¹⁸。他者の考えや意見に影響を受けずに（自己の意思で参考にすることはあっても）、自己の判断で意思決定や行動する積極的な構えのことである。経験に基づく実績や成功体験が学習者の自主性を育成する要因のひとつであるとすれば、実践事例における各年度の取組みは彼らの自主性を伸ばしたといって過言でないであろう。また、同じテーマに基づく課題探究活動であっても、グループメンバーの組み合わせによって自主性の育成の大きさに差異が見られ、また臨機応変に柔軟な対応が求められるような実践的活動を取り入れることで、自主性も大きく向上することを確認することができた。

最後に、若者の主体性やグループ活動を通して協働的に地域問題に向き合う態度を育成することは、彼らの地域に対する意識を高め¹⁹、将来における地域の担い手の育成への一助となるであろう。

《謝辞》本研究は、JST 共創の場形成支援プログラム JPMJPF2109 の支援を受けたものです。

参考文献一覧

- ・文部科学省（2023）『今、求められる力を高める総合的な探究の時間の展開（高等学校編）』、株式会社アイフィス
- ・文部科学省（2023/第2版）『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説総合的な探究の時間編』、学校図書株式会社
- ・大谷尚（2020/初版第4刷）『質的研究の考え方』、一般財団法人名古屋大学出版会
- ・アンドレ・シャミネー（2019）『行政とデザイン—公共セクターに変化をもたらすデザイン思考の使い方—』、株式会社ビー・エヌ・エヌ新社
- ・田中耕治（2015/初版第10刷）『やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ よくわかる授業論』、

¹⁸ 浅海は、主体性について「周囲の人の言動や自己の中の義務感にとらわれず、行為の主体である我として自己の純粋な自由な立場において自分で選択した方向へ動き、自己の立場において選択し、考え、感じ、経験すること」と定義している。これについては、浅海健一郎（1999）「子どもの「主体性尺度」作成の試み」『人間性心理学研究』、17（2）、日本人間性心理学会編集委員会、154-163頁を参照した。

¹⁹ これらの意識はひいてはシビックプライドの醸成にもつながる可能性がある。そのきっかけ作りになることは明らかであろう。

株式会社ミネルヴァ書房

- ・ 矢代隆嗣（2017）『自治体の政策形成マネジメント入門』、公人の友社
- ・ 島谷幸宏（2024）「未来につなぐ共創の流域治水」『BIOCITY』、No.99、6-14 頁
- ・ 上地幸市（2016）「主体的・協働的に学ぶ力を育む授業実践」『教職実践研究』、第 6 号、沖縄大学教職支援センター、1-8 頁
- ・ 井上史子・沖裕貴・林徳治（2006）「中学校における自主性尺度項目の開発」『教育情報研究』、21 (3)、日本教育情報学会、13-20 頁
- ・ 浅海健一郎（1999）「子どもの「主体性尺度」作成の試み」『人間性心理学研究』、17 (2)、日本人間性心理学会編集委員会、154-163 頁